



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

38

カロッサ

美しき惑いの年

ドクトル・ビュルゲルの運命

ルーマニア日記

指導と信従

手塚富雄訳

高安国世訳

高橋健二訳

国松孝二訳

中央公論社

世界の文学 38

©1965

カロッサ

訳者 手塚 富雄
高安 国世
高橋 健二
国松 孝二

昭和40年8月10日初版発行
昭和43年2月22日3版発行

価 430 円

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

美しき惑いの年

3

ドクトル・ビュルゲルの運命

221

ルーマニア日記

283

指導と信従

79

解説

502

年譜

517

美しき感じの年

ミュンヒェン到着

全世界のりんごの樹がのこらず枯れてしまつて、今はもうたった一粒の、あまり見ばえのしないレネット種しゅのたねしかこの世に残っていないとしたら、人々はそれをどう取り扱うであろう。その一粒を分解し、顕微鏡検査をほどこし、その精密な記述を後世につたえるであろうか。それとも運を天にまかせて、新しい樹木に育つ見こみはうすいにせよ、それを地にまき、とにかく結果を見ることにするであろうか。筆者が写しだそうと試みている一個の青年の生活は、かつてこのような姿で実在していたのであるが、この種しゅの人間の型も今はほとんど絶滅しようとしているので、ふたたびこういふ姿で現われるのは不可能なことであろう。その生活を描きながら、筆者は時として、りんごの場合とおなじ問いを自分に投げかけたのである。しかし、しあわせなことに、精神の世界では上述の二つの方法が結合されうるものであることを、芸術家たちがわれわれに示してくれているのである。それでこの書でもそのやりかたに従うことにしたい。つまりこの主人公の生活という一つの植物を組織している

種々の要素を研究するのである。しかしそれをむしろ、生命ある像としてそのままの姿で友人たちの胸のうちに沈める、そしてそこでそれが芽ばえ成長するのを待つことにしたいのである。

わたしはいよいよミュンヒェン市で、未来の医師となるべき教育を受けることになった。しかしこのバイエルン国の首都については、わたしはそれまでただ、書物や物語、とくに母のしてくれた物語を通じて知っているにすぎなかつた。そのうえ、ミュンヒェンという名はそのひびきだけで、わたしの心に或る風変わりな感じを呼び起こしていたのである。地中に住む矮人わいじんがちよろりと出て隠れるような趣き、同時に、さざなみがひたひたと寄せるようなひびきが、その言葉にあつた。そしてそれを前景として遠方には、常春藤つばきの花環模様で飾られたあの『ミュンヒェン名所図絵』というような書物の中にあるさまざまの風景が、あるいは華やかに、あるいは凄味せうみをおびて、立ち現われるのであつた。そういう絵に添えてある説明の韻文を、わたしはところどころ暗記さえしていたのである。

わたしの母が自分の生まれ故郷のミュンヒェンを一から十まで褒めそやす話しぶりは、少年時代のわたしに、ミュンヒェンには、どんなむつかしいことでもやすやすとやっける恵まれた人、かきこい人ばかりが住んで

いるのだという感じをしみこましてしまった。カーディングにわたしたちを訪ねてくるミュンヒェンの伯母や従妹たちは董や鈴蘭のほのかなかおりにつつまれている。そのかおりはわたしのそういう空想にいつそう輪をかけてきた。実はわたしはその芳香のもとであるチューブや小瓶の類は、ちゃんと自分の眼で見えていたのであるが、それにもかかわらず、それは彼女たちの生まれつきの肌からくるのだと、本気で考えようとし、ミュンヒェンの女性はいいにおいがするにきまったものだと言っていたのである。ほかにわたしの脳裡に浮かぶものに、扨りぬきの立派な紳士たちの姿があった。その人たちは優雅な婦人たちとつれ立って、そちこちの凱旋門や水晶宮のほとりを逍遙し、新入りのひとりびとりに好意のある挨拶をかえしてくるのである。また神聖の氣にみちたほの暗い教会の内部に足を踏みいれると、多様な色ガラスの窓々のあいだに、常燈明が燃えている。そして地下に安置された銀の棺のなかには、歴代の選帝侯や王たちが、国民のつきせぬ敬愛をあつめて眠っている。聴罪席さえ小さい礼拝堂ほどの大きさで、木彫の天使がそこから舞いあがっている。そしてその中に座をしめている司祭たちは、どんなおそろしい罪悪をもゆるす力をもっているにちがいないのだ、カーディングの坊さんには、とてもとてもゆるす力のないような罪悪さえも。さらに宏壯な

城の奥深くには、あの白髯の老人ルイトポルト・フォン・ウィッテルスバッハが、炯々たる眼をみはっている。この人の肖像は、バイエルンのどの学校にも飲食店にもかかっている。子供のときは、勲章をちりばめたこの人の青い軍服とそれに斜かいかけられた幅広いオレンジ色の肩帯がうらやましかったものだ。そして成長してからは、たれもがそうであるように、わたしもこの人に全幅の信頼をそそいでいたのである。溺死した王をいつまでも悲しんでいる疑い深いバイエルン国民の心を、この人は時とともに、このような信頼感に転化さしてしまつたのである。彼は「摂政」という称号以上を望まず、私を捨てて王位を護る任務に当たっている。そしてその王座の眞の相続者は、回復の見こみのない精神の闇につつまれて、広い庭をめぐらした或る白い建物の中に、昏迷の日々をすごしているのである。正統の王位相続者が、春秋に富む身でありながら、兄弟相ついで狂気におかされたということ、ドイツの諸王家の行末を語る前兆にほかならないと見る人も、すでにその頃から少なくはなかつた。

けれどもわたしたち一家のものには、そんな不吉な予言めいたことをいうような気持はなかつた。わたしたちは、この悲運を、一種の家庭的不幸と感じ、それについて言葉をかわすことを避けていた。しかしわたしの母は、

ルードウィヒ王の命日には絹の喪服を着て、教会をおとずれることを忘れたことはなかった。だが、強大な実行力と慎重な配慮によって世の歩みの平衡を保たせた人として、一家がこぞって尊敬していたのは、あの老ビスマルクであった。彼が官職を解かれてからも（一八九〇年、ド地位を）、その敬意に変わりはなかった。ひびきのきびし辞した）、その敬意に変わりはなかった。ひびきのきびし無風地帯ともいふべきおだやかな低地バイエルンの住民の耳朶を打ってきた。そして寡黙で、とかく病気がちになってきた父も、ひとたび話がこの新帝國建設者の上におよぶと、別人のような活気をおびて来るのであった。

ビスマルクの功績を認める点では、両親の気持はいつもびつたり一致していた。妹とわたしは早くからそれを承知していた。で、時として一家の中に不穏な空気がただようけはいでもあると、わたしたち二人は、なにげなくたくらんだ質問によって、この老宰相のことを談話の中にもちこむのであった。そしていつも上々の和解の効果をおさめたのである。

元来、父にとっては、わたしがゲーテを読みすぎるということが、なかなかの苦勞のたねだった。精神づくめでも人間は駄目になることがあるというのが、父の意見であった。で、わたしが自由戦争の歴史や、さらには『医学評論』を読んでいるところを父の眼に触れるよう

にすると、ほつと愁眉を開くのであった。父は、この雜誌に、彼がピロカルピンで全治させた最新の病例の報告をいつも発表していたのである。患者にたいする父の無理のない扱い方にまことにふさわしいことであつたが、父がビスマルクにおいて驚歎している点は、その強烈な性格よりは、複雑な国際関係を織り成している測り知れぬ諸力によく対処してゆくその英知であつた。ビスマルクが、バイエルン国の特殊な権利の存続を認めたこと、普仏戦争がすむと彼が昨日の敵の心を和げるのに多大の力をつくしたこと、これらを父は高く評価していた。い

* バイエルン王ルードウィヒ二世（一八四五～一八六）のこと。一八六四年から王位に就く。特に、リヒャルト・ワーグナーの援助者として聞かえており、人間嫌い、浪費癖も有名である。一八八六年、精神障害と認定され、シュタルンベルク湖畔のベルク城に移されたが、同年六月、その湖で溺死した。その際、医師もそれに殉じた。ルードウィヒ二世のことは、本書においても、親愛の情をもって再三言及されている。

摂政ルイトポルト（一八二一～一九二二）は、ルードウィヒ二世の叔父に当たる。一八八六年、ルードウィヒ二世の溺死直前、摂政となり、さらにルードウィヒ二世の後をついでオットー一世（一八四八～一九一六、ルードウィヒ二世の弟）が王位についてからも、摂政としてバイエルンの国政に当たった。

* ルードウィヒ二世に次いで、バイエルン王となつたオットー一世も、一八七二年以来、精神障害をきたしていた。

* 結核疫であるカロッサの父が、常に絶対的な自信をもって用いた薬。『青春變転』においても言及されている。

な、この政策においては、温和な隠微的な地方医師のほうが一代の大政治家をはるかに凌駕していたのである。たれも自分の説に賛成しないことは承知しているのであるが、父は政治談となるときまって持説を主張した。ドイツ人はフランス人と結ばねばならない、それは世界の救いであるというのである。国と国を代表する者のあいだの交際が、個人個人のあいだのそれと同じように行なわれて、なぜいけないのか、なぜ国際間の交渉では、相手に心からの誠意をもって手をさしのべることが、ばかなこと、損なことときめられているのか、父にはどうしてもそれが理解できなかったのである。くつろいだ日などには、こんなことも言いだすのであった。われわれバリエルン人は最近プロシア人と非常によく折り合っているではないか、してみればライン河の向こうの隣人と友達つきあいをするのもそうむづかしいはずはないではないか。この政見は、カーディングの市民たちが木曜日の晩に集合するレアル酒店（木製の亭主の像が看板になっていた）で、いつも大笑いをひき起こした。こんにちでは父のこういう論法はもう理解しがたいことだらう。ミュンヘンの家にときどき「貸室あり、プロシア人の申込にも応ず」とわざわざ友好的な文句を書きそえた札がかかげられてあった時代は、われわれのうちの最年長者でも、容易に思い出せなくなっているのである。

母は非常な苦心の末に、あの濃褐色のビロードのようなフリーゲン蘭を家の庭に咲かすことに成功した。これはわれわれの地方では花が咲かないことになっていたのである。そして聖霊降臨祭にそれを披露して父をあつといわした。さっそく父は、このめつたに見ることのできない花のいちばん美しいのをえらんで、フリードリヒスルーに閑居している老公爵に送ろうということを考えていた。球根もろとも掘り出され、ていねいに荷造りされた。なお父は夜おそく、手短かながら一通の手紙を書いて、それを包みに同封した。

いつもそうであるように、真摯な父が自分の重大事に没頭しているさまを見ると、わたしのうちにも、わたし自身の重大事が二重に強く眼をさましてきたのである。わたしはわたしの小室にさがって、浩瀚な一篇の詩を書いた。その第一稿は久しい以前から一冊のノートブックに書きおろされていたのである。真昼間、宿題勉強のあいまに生まれたのに、それは『夜思う』という暗鬱な表題をつけられていた。ひたすら未知のものを追求しながら、慣習的なものにも離れることのできない青年の憧憬と不安が、ともかくもそこに表現されていた。わたしより年下の学生で、すでに立派に一人前の詩を書きこなしていたフリッツ・カウフマンは、かねてからわたしにわたしの作品をベルリンのオットー・フォン・ライクス

ネルのもとに送れと、吹きこんでいた。ライクスネルの批評眼に彼は絶対の信頼をよせていたのである。わたしはこの忠告に従おうと決心した。父もむすこも、自分の書いた手紙を周囲には見せなかつた。こうして翌朝二つの発送物は出来あがっていた。妹のシュテファニーが、蘭の包みを郵便局にもってゆく役を志願した。わたしはわたしの二重の手紙をポケットに忍ばせて、彼女に同行した。小包みの送り先を読んだとき、局の係員が「おほう！」と目をまろくした光景を、わたしたちはたのしんだ。しかしわたしたちはなにげないふりをよそおつた。ビスマルク家との通信なんぞ、うちにとつては日常のことなんだといわんばかりに。

数週間はずぎた。学校は休みとなつた。庭園の春の最後をかざつたさまざまの花も時期が終つた。そういうある朝のこと、父は真夜中の出産への往診から家へ帰つてきた。ここにも、もう患者が父を待ち受けている。腰もかけずに居間で朝食をとりながら、父はどんな郵便物が来ているかとたずねた。「別段のものもないようでしたわ。印刷物が二つ三つと、フリードリヒスルーからの手紙が一つ」その母は事もなげな調子で答えようとしたが、その演技は上出来ではなかつた。さあ、それはわたしたちにとつてこのうえもないうれしい日となつた。ビスマルクの慇懃な返書は、花にたいするというよりもそ

れに添えられた父の手紙にたいするものであつたが、それは徹夜で疲労していた父を一瞬のうちに青年のように若返らしてしまつた。紋章の打つてある書簡紙を、父がためつすがめつしていたさまは、今でもわたしの記憶にありありと残っている。以前ある患者の形見として贈られた限鉄をながめ廻したときの様子とまったく同じであつた。多数の人を病氣から救つたが、そのあげく今では自分自身疲れやすくして興奮剤の助けを借りねばならなくなつていた父は、この偉大な同時代者からの反響によつて、その後もながく元氣と喜びをあたえられたのである。それに父はその頃はもう、患者にささげるべき力を蓄えるために、家族との交渉から遠ざかりがちになつていた。再び父をすっかりわたしたちのものとするためには、わたしたちは何か熱を出すとか、少なくとも気管支カタルぐらいになるとかしくなくてはならなかつた。そうすると父はまたすぐに溢れんばかりの愛をわたしたちに味わわしてくれたのである。このように仕事熱心なのだから立派な財産も築き上げられたはずであるが、こういつたタイプの人にはそういう才能は欠けていた。この種の人は、自分の家を出はいりするときに、考え事をしていて放心のていであるから、貧しい人のだれかが「ここに善人が住んでいる」と他の貧しい人たちに知らすために、時おりその門柱にチョークで書きつけておく符号を拭き消

すだけの才覚がないのである。

むすこにも同様に反響がめぐまれた。彼の「夜思う」はベルリンで好意をもって迎えられたのである。激励的な賞讃のことばが訓戒に移っていき、その訓戒も芸術上のそれというより、むしろ道徳的態度に關するものであったことは、多分わたしの自尊心にびったり来たとはいえなかったのだろう。そこだけはわたしは、ほかの個所ほどには、くりかえして読まなかった。「先人たちをあなたの胸から離さぬように」そうオットー・フォン・ライクスネルはその手紙の最後に書いた。「しかし彼らが彼らの時代を見たような内的な眼で、あなたの時代を見ることを学ぶのが肝要です。あなたの内部を掘りさげ、あなたの存在の核心を探究していただきたい。が、けつして性急におちいつてはならない。ただ新しいからといって、それを解決とみることを、避けるべきです。憧憬にみちたあなたの青春を充分に楽しまれるように。しかし官能的な生活享受への欲求を制御することを学んでいただきたい。わたしの言葉に耳をかたむけていただきたい。あなたがあなた自身の内部にたくわえる一つ一つの火花の力が、あなたの天分の根原を養うようになるのです。わたしは禁欲を説くのではない。われわれはたれしも過ちや罪を経て真理に到達するほかはない。しかしあなたは、できるかぎり、あなたの心の純潔をまもらなけ

ればならない。われわれを救う芸術は、女性的な芸術であつてはならない。男性的な、力にあふれた貞潔な芸術にこそ、『未来』は属しているのです」

九十年代のベルリンに生活していた練達の士ライクスネルは、たしかにそういう警告と懇願を發するだけの理由をもっていた。しかしゲーテの若い使徒にとつては、女性はまだ一個の神秘であつた。それは彼の心にあるいは恐怖を、あるいは信頼の念をよび起こした。いずれにせよ彼は女性というものをけつして疑惑の眼で見る気にはなつていなかった。貞潔を讚美する言葉は、ものごころがついてからこのかた、説教壇や教壇から聞かされていた。ドイツ帝国の首都からは、彼はもつとちがった言葉を期待していたのである。といつてそれがどんな言葉であるべきかは、彼自身にもはつきりしてはいなかったが。しかしとにかく、ライクスネルは、真理への道は罪を経由するものであることは認めたのだ。この一句は彼にくつろぎをあたえた。彼はそれを一種の「緊急予備金」として、自分の記憶の中に預け入れておこうと考へた。要するに彼は、この遠方の賢人の手紙の中から、自分に望ましいことだけを、読みかえすたびごとにいよいよ巧みに読み取つていったのである。そしてこの手紙を護符のようにいつも肌身離さず持ちあるいた。

大学に入学するまえ、わたしはこのものしずかなカト

リック教地方のただなかで、時代精神の訪れの先駆とも
いふべき一つの場面の日撃者となつた。しかしそれはけ
つきよくまた、時流を追わぬ人々のかくれた勝利を予感
させるものであつた。カーディングからバイエルン森林
山脈の方向へ二時間ほど離れたところに、ビルゲルスド
ルフという町がある。その医師が数年来主任司祭と交
戦状態にはいつていたのである。司祭は医師に最初は何
度か内々の忠告をあたえていただけだったが、それが徒
労におわると、今度は説教壇から公然と警告を發するに
いたつた。その理由は、その医師が、夫を捨てた一人の
婦人と、民法上の手続きはすまして結婚生活をしていた
が、それが教会の手を経てはいないということにあるの
であつた。満面をひげでうずめた巨大漢、大地の神のよ
うなそのドクトルは、そんな戒告はうけつけなかつた。
彼の回答はさつそく發せられた。彼は嚴肅に自己の家族
の教会離脱を宣言し、その後も彼の多数の子供を宗教教
育から遠ざけてしまつたのである。ところで彼の長男が
病氣になつて絶望状態におちいつたとき、司祭は彼に宗
礼上の援助を申し出たが、そんなものは不用だとすげな
くはねつけてしまつた。少年はついに死んだ。医師は教
会の葬禮などは望まず、ミュンヒェンからヘッケルの弟
子である一人の自由思想家を招いた。埋葬の際に墓前で
その人に何か言つてもらおうというのである。わたしの

父も、このビルゲルスドルフの同僚とは学生時代からの
友人であつたので、その長子の死亡通知を受けた。父に
とつて埋葬に顔を出すことは当然の義理であつた。母は
家へのこつたので、父はわたしをつれて出かけた。わた
したちは自家用の四輪馬車に乗つてすこしばかり遅れて
着いた。葬列はもうその家を出ていた。一隊の警官がラ
ンダウから出張して、墓地への道を警戒した。妨害行為
をふせぐためである。しかし騒動を起こそうなどと考え
た者は一人としていなかった。土地の人々は、無愛想で
おこりつぱいが腕はたしかな自分たちの医師にたいして
なかなかの好意をよせており、好戦的な司祭の肩ばかり
もつというのではなかつた。そういうわけで普通の葬禮
と同様に、棺のあとに多くの人がしたが、田舎楽隊は
律儀にマーチの哀音譜を吹きたてた。わたしはミュンヒ
ェンからの異教の弁論者を見んものと好奇心に燃えた。
天帝に叛いた天使のように悪魔美にかがやく人をわたし
は想像していたのである。ところが悪魔美どころか、そ
の人は当日きつての幻滅に下落してしまつた。その人の
長い捲き髪はすでに霜をおび、くもつた眼鏡ごしに陰氣
くさい眼がおずおずとのぞいていたことは、まだしも我
慢するとして、氣の毒にもこの革新論者は病氣もちであ
つた。父があとでわたしに説明してくれたところによる
と、彼は脊髄病をわずらつていたのである。無言でいるうち

は破綻はなかった。が、さていよいよ声をはりあげると、彼の感動は双方の膝へ移動して、それがふるえはじめた。熱心に話せば話すほど、このふるえは高まり、両肩両腕もお相伴を^{しろうはん}はじめた。これがどんなに民衆を面食らわしたかを眺めるひまもなく、わたしたちは当のその人についてにはらしらないわけにはいかなかった。彼は墓穴にあまりに近くよりすぎ、靴の先がその縁をこしているのである。ふるえがこうじると落ちこんでしまいかねないのだ。こうしてピルゲルスドルフの人たちは、驚きやら気の毒やらでこの受難の人物を見つめとおしたのである。その受苦のさまは、やっぱり昔からの信仰に忠実であつたほうが良いということ、みんなに痛切に教えているようであつた。またたれもが内心ひそかにこの人と、ここにはいぬ司祭とを比較して考えてみたくなつたのである。司祭にはあきらかに神の恩寵がそがれている。容貌には進取の氣象があらわれ、手足にはふるえがない。真夏など、すわ夕立というときには、進んで畠に姿をあらわし、元氣いっぱいに熊手をふるって、麦束を荷車に放りあげる人だつた。

それはそうとして一同は、この遠米の人の言葉にひそかに耳をかたむけた。また彼がねずみ色の小形本を開いて韻文の幾節かを読みあげたときにも、十字架の刻印のある各自持参の祈禱書をたしなみ深く閉じたままにして

おいた。それにその詩句も、何ひとつ不逞なことは告知していなかつた。一種のサタンのミサを期待していた人は、当てがはずれた。そこに述べられたのは、世界の全にして一なる姿、最高の実在、宇宙の霊、神秘で永遠な英知界への新しい転住、要するに何人の心をもそこねない温和な文句ばかりであつたのだ。

墓地では男子組と女子組が二手にわかれて整列していた。わたしは男子側の先頭に立っていて、ウィルンジングの農場所有者の若い妻と向きあつて、その黒い被衣のひろがりにはそばの婦人たちの顔を見えなくしていた。その婦人は、したしみのこもつた、そしてちよつとずるそうな表情でわたしの父にほほえみかけるのであつた。偶然わたしは知っていたのであるが、父にたいする彼女のそういう親愛の表示には理由があつた。父は幾年かのあいだに、あの恐ろしい曲がりようをした釧子のたすけをかりて、彼女の胎内の五人の子供にこの世の光を浴びさせたのだ。そしてその五人とも丈夫で育つていたのである。そのほほえみから彼女はしかし、すぐに女らしいつつましやかさに戻るのであつた。そして考えこんだ様子で、例の人のふるえる膝に目をやりながら、「ああ、マリアさま、お恵みふかいマリアさま、エスさまと共にましますマリアさま」とささやくのが、はつきりと聞こえてきた。わたしの立つているところは低い塀のそばだ

った。白い教会と白い司祭邸のあいだには刈入れのすんだ畠がみわたされる。羊の群れが一塊のにぶ色の雲のように、草を食みながらしだいに向こうへ移ってゆく。そして遠くは火の海のように赤い。それはおそ咲きのけしの畑なのだ。森林山脈は、ここから見てももう、カーディングで見るよりは、ずっと立体的な形になっていて、霞をやぶって迫って見える。その方向にけし畠はだんだん青味がかって消えてゆく。なんとという心のあたたくなるような眺めだろう。たとえどんな高遠な思念であろうと、この風景のなかでは、ひびきを失ってしまふ。人間に直観的な美をあたえることがないからである。農民的な頑丈一点ばりのあの医師は、そのことにはいっこう気がつかないらしい。われわれには彼のそういう気持が不思議なことにはさえないのであった。《大いなる母》大地と《神の母》マリアは、数千年米この地方では一つものになつてゐるのだ。何人の心にも、地上のすべてのものに恵みを垂れる聖母と、その腕に抱かれて、おのずと威のそなわつてゐる顔にはほえみを浮かべてゐる世界の柱である嬰兒の姿が、深い感動とともに生きてゐるのだ。もろもろの光をちりばめた青色の聖母のマントのうちには、いっさいのものが、存在の場所をあたえられてゐるのである。森、畑、菜園、納屋に菓をいとむ可憐な燕、その燕を捕るために生まれついでゐるらしい

鷹、そしてすべての人間が――。世にある者も亡いものも。

われわれは、遠来の説教者が早く切りあげてくれたことを感謝した。式は三十分かかるかからないかにすんでしまつた。最後に、めいめい、小さいシャベルで土を三度すくつて棺にかけた。これは普通のしきたりどおりであつた。ただし聖水盤のかわりに、秋の草花を溢れんばかりに盛つた籠が備へつてあつた。涙に眼を赤くした独立不羈の喪主夫妻は、アスターとガヤルデイ菊をえらんで、亡き子の墓に投げ入れた。縁者たちがそれにつき、父とわたし、その他二、三の者もそれにならつた。お百姓たちは、しきたりの土掛けだけをして、このほうは遠慮した。参列者は順々に喪の家族のところに行つて握手した。わたしは親子は医師の家でもてなしを受け、それからガナッケル村のほうへ出てカーディングのわが家に向かつて馬車を駆つた。途中ずつとわたしたちは考へにふけていた。父は今日の件については頑強に沈黙をまもつていた。ただ一度ふいに不満の口調で、あの若者にピロカルピン治療を怠つたのは残念だ、手おくれにならぬうちにその適量をあたえていたら、今日の葬礼には及ばなかつたらうに、と洩らしたのであつた。

一八九七年の十月に、わたしはカーディングのわが家

をたつてミュンヘンへ向かった。今度はランツフトを越えて先へ進むのだ。フライジング市をすぎてから一時間とたたぬうち、一人の子供が、あいている窓から指をさしてさげんだ。「聖母教会の塔だ。」そちらに向けられたわたしの眼に、あの有名な寺院の二つの球形屋根が映った。山ごしの南風の強いその日は、一大レンズをあてたように、雪のはだらな濃藍のアルプスを、ぐっと近くにひき寄せていた。まるで山なみが街中に踏みこんできたような感じだった。

ついに列車は轟音とともに大きな殿堂のなかへ乗りこんだ。こうして、ものごとろがついてから初めてわたしは、わたしの頭上に巨大な弧を描いている金属とガラスの大屋根を仰いだのである。初めてわたしは、これから地球を一巡しようとしている軌道の、鉄の起点の前に立った。このような建物こそは、見通すことのできる《無限》であり、時間の中の諸景観をつつむ一つの《超時間的存在》であった。喪服を着た婦人がわたしとともに汽車をおりた。一人の若者がそれを迎えた。二人は抱きあって泣いた。それを目撃したわたしは、今までにこれほど強い悲歎と愛情とが、人の顔にあらわれたのを見たことはないと思つたくらいである。理知と心情との何という素晴らしい重唱だろう。厳密冷静な悟性が精確を極めた計量によつてこの大規模な建築を造営したのだ。しか

し、このような別離の場所、迎えの場所以上に、人間の心情の輝き出るところはないのだ。ここ以上に、心からの許しと悔いの生まれるところはないのだ、短い生命の神聖な価値が身にしみて感じられるところはないのだ。二条の線路のあいだにおそれもなく遊んでいる焦茶色の二羽の鳩の姿を、わたしは不思議な思いでしばらくながめた。しかしすぐ一人の駅員にうながされて出口にむかった。

駅前の広場で、赤いふちなし帽をかぶった一人の大学生が通りすがりの尼僧にむかつて、哀願的な調子でしゃべっている。ミュンヘン名物のビールを飲み過ぎたものらしい。それでもまだ尼僧に自分の難儀のてんまつを説明するだけの精神の働きはもつていた。自分は友人につき合つて朝酒をやり、相当な量をひっかけた。だがそうかといつてべつだん恥ずべき結果を来たしてはいない。ただ遺憾なことには、手から抜け落ちた散歩用のステッキを自分で拾いあげることがどうしてもできなくなつてゐる。神も照覧あれ、自分は幾度かためしてみた、だがどうにもからだの平均を失いそうなので中止しなければならなかった。で御上人がわたしのためにこのキリスト教的博愛の事業をおこなつてくださるなら、自分は生涯を通じてその御恩を忘れないであらうと言つてゐるのである。みごとな鹿の角の握りのついた太いステッキが街